

祇園小学校 校長だより（第32号）

平成31年2月1日

# 「清心」

文責 校長 中原弘之

学校教育目標 「学校と地域を愛し、知・徳・体の調和のとれた児童の育成」

## ポケットに手を入れたまま転んでしまうと・・・

以前の勤務校で、小学6年生の男の子が、ポケットに手を入れたまま転んで、腕を骨折してしまっていたことがありました。三角巾で腕を吊った状態で卒業証書を受け取る姿が今でも目に浮かびます。

転んだ時、とっさにポケットから手を出し、手を着いて頭部等を守ることができない場合もあります。登下校の際、ポケットに手を入れている子には、手袋着用を呼びかけています。ご家庭でのご配慮をお願いいたします。

## A I の時代だからこそ、人間形成の教育へ

教育工学が専門で聖心女子大学名誉教授の永野和男氏は、「情報化によって知らなくてもいい情報、知りたくない個人への批判情報が簡単に耳に届く。これらに打ち勝つには、情報に惑わされない的確な判断力と、自分に対する信念の形成が不可欠になる。自分を信じ、どんな場合も自信をもって物事にあたることができる力を支える要因、一つは本人の不断の努力ではあるが、もう一つ、どんな逆境の時も本人を認め励ましてくれる人の存在が（できれば身近に）必要不可欠と考えている。」と述べられています。子ども同士が認め励まし合う環境をつくるのはもちろんのこと、まずは大人が子どもを認め励ましていきましょう。

### 祇園歴史の旅（その32）「西沢乙吉氏の軌跡」

中部地区町内協議会設立25周年記念誌（平成20年発行）、佐世保史談会会員の筒井隆義さんの記念エッセーより抜粋。「新しい活気を求めて南へ移る。その一つの典型を西沢乙吉という近江商人の足跡でたどってみましょう。

明治35年（1902）、滋賀県愛知（えち）郡泰荘町で麻織物商を営んでいた西沢乙吉氏は、明治の国策である「富国強兵」の一翼を担い、明治19年いらい目覚ましい発展を続け、この年市制を施行した佐世保にやってきました。28歳の西沢氏は、まず天満町に呉服店を開業。その後の動向を見ながら松浦、島瀬、そして上京町へと移りました。

昭和11年、資本金20万円の株式会社に成長しましたが、太平洋戦争の開戦で閉店のやむなきにいたり、昭和20年6月の空襲で店舗も全焼。この混乱期、事業を引き継いだ西沢芳太郎氏は、8月15日に敗戦となって戦火が止むとすぐ商売を再開、昭和25年6月の朝鮮戦争を契機に急上昇した景気を背景に業績を重ね、昭和38年当時従業員400人、年商8億円を上げました。

800年前の鎌倉時代からその名を知られる近江商人は、京大阪に近い地の利を生かし、主に蒲生、神崎、愛知の湖東三郡から集団で出、のちに「千両天秤」と呼ばれる行商できっかけをつかみ、室町時代は市、座でも活躍して、江戸時代全国に広がりました。売る者も買う者も、世の中も得をするという三方徳の商道徳が発展の原因でした。

取扱う商品は、当初近江産の麻、蚊帳、畳表などでしたが、その後は太物その他主要品を扱い、お互いに店舗網を利用しての『産物廻し』で利を増やしたとされます。この商魂が新興地佐世保でも成果を見せ、西沢呉服店から現代まで百余年の盛業を続けています。

このほか、明治37年創業の和菓子『松月堂』は山口県下関、同じくそばを中心に和食の『岡崎』は同年に熊本から、翌38年田中丸呉服店として創業したデパート玉屋は当初松浦町（現松浦公園の一角）の店舗。現在の栄町でデパート開業は大正9年9月。鉄筋コンクリート4階建ての偉容は人々を驚かせました。田中丸一族は佐賀県牛津町。日露戦争で傷ついた傷病兵の繃帯（ほうたい）用さらし木綿の出荷がきっかけでした。」

次回は、「都市に不可欠な娯楽」と題して、芝居小屋や映画館などをご紹介します・・・。